

創世記 9 章 20－29 「ノアの箱舟 5 平和に潜む罠」

2026. 02. 15

いよいよ、今回でノアの物語の最後になります。これまで、ノアの生涯を見てまいりましたけれども、本当に、ノアは神と共に歩んだということが分かる素晴らしい生涯でした。ところが今日の箇所は少し違います。この最後のところでノアの失態が物語られているのです。

私は聖書を読みながら時々思うのですけれども、聖書の中に現れる信仰者の姿というのは、いつも完璧ではないなと思うのです。信仰の父と呼ばれたアブラハムにしても、旧約聖書の代表とされるモーセも、あるいはあのダビデ王ですらそうです。誰もがどこかで過ちを犯しています。聖書はそのような信仰の人物の失態を隠そうとはしていません。ここでも同じです。ノアは神の目にかなう、ただ一人の正しい人物であったはずですが、聖書はそのような正しい人、ノアの失態を描くのに何の躊躇もないのです。

このことは、本当に厳しい問いを私たちに突き付けていると、言わなければなりません。どんなに立派な人物であったとしても、自分は大丈夫だとは言えないということだからです。

ノアのような信仰の模範とすべき人物であったとしても、少し油断をしてしまうなら、たちどころに罪を犯してしまうのです。どれほど長生きしたとしても、どれほど長い間主と共に歩み続けて来たとしてもです。つまり、「罪」には定年というものがないようです。罪は、年齢にかかわらず、あるいは経験に関わらず、いつでも気を引き締め続けていなければならない事柄なのです。もうここまで来たから大丈夫、信仰の歩みを長く続けてきたから大丈夫とは言えないということを、私たちは心に刻みつけておかねばなりません。そういう意味で言えば、神は正しい人であるノアに有終の美というものをお与えにはならなかったのです。

しかしながら、今日の聖書を読むと、私たちはノアに同情する部分を見つけます。ノアには長い生涯の歩みがありました。ノアは家族とともに、箱舟を作るという大仕事をやってのけ、自分の家族だけが洪水の中から救い出されたのです。ノアの一生は九百五十年であったと最後に書かれています。そして、洪水の後も三百五十年生きたのです。その時のことです。長い間生きてきて、その晩年にノアは今や一人の農夫として土に向かい、これを耕し、収穫の喜びを得ることができるようになりました。人生の晩年に味わうことに

なったささやかな喜びだったと言ってもいいと思います。ところが、そうして得た、ぶどう酒が、ノアを失態へとつながってしまったのです。

マタイの福音書 24 章 37－39 節にこういうみ言葉があります。

「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。洪水前の日々には、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。」

ここには、ノアの時代の人々は洪水が来るまで、神の裁きがあるとは分からなかったと記されています。ノアの時代の人々は確かにそうでした。しかし、それは今の時代に生きる私たちにも同じことが言えます。そのような日は再び必ず来るといいます。だからこの言葉の続きにはこうあります。マタイの 24 章の 42 節です。

「ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから」

この福音書で語られているように、このノアに起こった全ての出来事は人ごとではありません。私たちも、また、同じように問われているのです。ただ、私たちが忘れてはいけないことがあります。ノアは神に正しいと認められた人でした。そして同時に、その人生の晩年に失敗をしてしまいました、醜態をさらしてしまいましたが、神はその失敗をお赦しにならないような厳しいお方ではないのです。

ただ、私たちは覚えていなければならないのです。いつも、罪は戸口で待ち伏せしているということを。

けれども、今日の聖書で、この罪が問われているのは、実はノアではなくて、その息子であったと書かれています。確かにノアは、ここでぶどう酒に酔い、天幕の中で裸になってしまうという醜態をさらしてしまいます。確かにそれは問題ですけれども、神は、そのことでノアを戒めてはおられません。そうではなくて、その時に、ノアの息子たちがどのような振る舞いをしたかということに視点が置かれているのです。そして、よく見てみますと、このことの方が、実はもっと大変な問題であるということが分かるのです。

ここで起こった出来事はそれほど複雑ではありません。天幕でぶどう酒を飲んで酔っ払って、ノアは寝てしまっていたのでしょうか。それを息子のハムが見たのです。そして、この息子はその父親の姿を、面白がって兄弟に告げます。

ここで息子ハムが何をしたのかについては、色々な考えがあるようですけれども、父親の酔った姿を面白がって他の兄弟に告げたというだけで十分でしょう。22 節にそう記されています。本当であれば、ハムが父親を見た時に、裸を隠してやることもできたはずなのです。しかし、ハムはそれをしないで、兄たちに告げたのです。この息子は、小さな

少年だったわけではないのです。もう立派な成人です。成人というよりも、ノアの年齢から考えれば、かなりの年齢であったはずです。その息子が、神が正しいと認めている父親の醜態を笑い物にしたのです。

そして、この箇所はこの出来事が非常に大きな罪であると描いているのです。つまり、ここで何が起きているかといいますと、それは、父と子との関係の断絶なのです。創世記は、初めに、アダムとエバ、つまり男と女の断絶を描きました。そして続いてカインとアベルを通して、兄弟の断絶を描き、ここではノアとその息子ハムを通して、親子関係の断絶を描いているのです。そのように、神によって新しくされた世界であったとしても、罪はますます広がっていったことを、この箇所は物語っているのです。

聖書は、この父と子、あるいは両親と子どもとの関係についてあらゆるところで語っています。その代表的なところは、十戒の第五の戒めにあらわれています。

「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである」。このように、出エジプト記20章12節に記しています。

この「父母を敬え」という第五の戒めがどれほど大切かは、この戒めが十戒の真ん中に置かれているところからも分かります。初めの四つの戒めは、神に関する戒めです。あとの六つの戒めは私たちの生活に関する戒めですけれども、そのちょうど真ん中に、この戒めを置いて、神を大切にすることが、自分の生活を築きあげる。そして、そのことは両親を敬うということにかかっているのだということが、ここで表されています。このことから、この戒めがどれほど大切にされているかが分かるでしょう。

自分の上に立てられたものを敬うということは、まず第一には神を敬うことですが、そのことは、まず自分の両親を敬うということから始まるというのが、聖書の基本的な考えなのです。

しかし、そう考えてみると、父母を敬うということが、どれほど大切で、またどれほど難しいかということを、私たちはそれぞれが身をもって経験しているのではないかと思います。ある神学者は、自分が若い時代に、この戒めは最も簡単な戒めであると説教したことがありました。けれども、そう本当に言うことができるかと、後になって随分考えるようになったことが記されています。もっとも身近に接しているのが両親ですから、それは難しくないことだとはじめは思うのです。けれども、だからこそこの父母を敬うということは、非常に難しいことでもあるのです。

私が牧師になったばかりの頃、この同盟福音の学生たちの担当牧師をしていたことがありました。当時は学生の多い教会の担当ということもありましたが、毎日のように、学生

たちと向かい合っていました。そして、その度に、突きつけられていた問題は、学生たちと両親との関係のことでした。

ある時、私が学生たちにこの十戒の話をしていました。「あなたの父と母を敬え」という聖書を読んだ時に、すかさず「そんなことできん」という言葉が聞いていた学生から返ってきたことがあります。もちろん、学生という時期は、ちょうど反抗期を迎える時です。ですから、そのくらいのことは言えた方が健全なのかもしれませんけれども、これは一筋縄ではいかない問題でした。私の当時働いていた教会は、平日の木曜の夜に学生のための集会をしていました。集ってくる学生のほとんどはクリスチャンホームの子どもたちではありませんでした。毎週教会に送り出してくださるだけでも、かなり理解のあるご両親たちだったと思いますが、学生たちの口からは親への不満の言葉が次々に出ていました。

反抗期の子どもと向かい合うために、ご両親は本当に格闘していると思います。けれども、学生たちも苦しんでいるのです。今、自分の娘が中学生になるなかで、余計にその思いを考えさせられてもいます。

詩人の島崎光正という方が、何かの書物で、「人生で一番厳しいのは中学生の時だ」と書いておられたのを読んだことがあります。私はそれを読んだ時に、初めは抵抗しながら、「そんなことはない、大人になったらもっと厳しいことがあるではないか」と思いながら読んだのです。けれども、すぐにその思いを改めました。その通りだと思うようになったのです。その時期と言うのは、何もかも自分で考えて自分で判断していかななくてはならなくなるのです。中学生の時期というのは、親に言われるままにではなく、自分のやり方を見つけていく時期でもあります。けれども、自分の考えるようにやっとうまくいくという自信もないのです。また、反抗期を迎えていますから、親を当てにするとということもしたくない。そういう時期に自分の将来について考え始めるわけですから、とても厳しいのです。まさに人生で一番苦しい時期なのだろうと思うのです。そうやってみんな大人になっていくわけです。

私はこのノアの物語を読むときに、息子のハムがとった行動の気持ちが少し分かる気がするのです。おそらくノアは立派な父親であつたに違いないのです。子どももそんな父親のことを尊敬してきたと思います。あの大洪水を経験し、神が自分の父親だけを正しいと認めたのですから、その父親のことを誇りに思ったに違いないのです。だからこそ、この親に逆らうことなどできなかったのではなかったかと思うのです。

実際に、他の二人の息子たちは非常に優等生です。裸の父の姿を見ないようにして、着物を裸の父にかけてやれたのです。この親から育てば、立派な息子として育っていったのだらうと思います。けれども、ハムはそうではなかった。その父を見て、この父がこんな失態を犯すのかと、どこかで嬉しかったのだと思うのです。自分と同じではないかと思ったのではないのでしょうか。はじめて、父に親近感を感じたのかもしれないのです。

考えていただきたいのですけれども、いつも完璧な両親、いつも正しいことばかり言う親の前で生きなければならない子どもはどれほど苦しいかということ。

ハムは思わず、ほらお父さんだって、こういうことがあるじゃないかと、兄弟たちに言ってやりたかったのではなかったか。もちろん、それは間違ったことです。そんなことはしてはいけないことなのですけれども、そうせずにはいられなかったハムの悲しみがあったのではなかったかと私は思うのです。

もちろん、これは私の勝手な想像です。そんなことを書いている聖書学者は一人もありません。間違っていることは間違っているのです。けれども、私は思うのです。間違ってしまうものにも、それなりの理由はあるのだと。

興味深いのはこの後です。ノアはここで出来事を知った後で、言います。25節です。

「カナンはのろわれよ。兄たちの、しもべのしもべとなるように。」 25節

この箇所を読んでいると、「あれ？」ということになるのです。「呪われよ、ハムよ！」と言わないで、突然「カナン」という名前が出てきているのです。これはハムの息子の名前です。

これが創世記の書き方だと言ってもいいかもしれませんが、呪いの言葉はいつも直接に語られておりません。ハムを通り過ぎて、ハムの息子に向かいます。これは、ある意味で正しいのだろーと思えます。ハムが父を軽んじたように、ハムの子もまた父を軽んじるようになる。そして、ただ、そうなるのではなくて、兄弟三人の中で、このハムの子孫は、弱い立場に立たされていくことになるのだということが、ここで物語られているのです。こうして、ハムの子どもは、神から離れた一族として、この後の物語で語られるようになっていきます。それが、この後につづくバベルの塔を築きあげた権力者ニムロデへと続いていくことになるのです。そして、この時、父を辱めから守ったセムの子孫からアブラハムが生まれてくるのです。

このようにして、そののろいが直接にハムには語られないのは、カインの時と同様に、ハムがそれでも神と共に生きることができるようという配慮であったのかもしれませんが。聖書はここで、明確に罪の広がりについて語っています。ですから、ここで過ちを犯してしまったハムに容赦はないのです。

けれども、私たちは知っています。神は、私たちの罪を、赦されないようなお方ではないのです。テモテの手紙第一2章4節にこうあります。**「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」**この「救われて」というのは、この場合「悔い改めて」と言い換えてもいいと思います。

神は、ハムのような者であったとしても、学生たちのような、生きること必死に戦っている者であっても、老年になってささやかな自分の人生の喜びを噛みしめているノアのような人であっても、神の真理によって生きを願ってくださるお方です。

ですから、失敗することを恐れることはありません。ノアでさえ失敗することがあるのですから、私たちには当然のことです。問題は、失敗した時にどうするかです。神は私たちが救われることを願ってくださっているのですから、このお方の前に、自らの誤りを認めて、悔い改めることです。

このことに、私たちはおっくうになってはなりません。私たちが、悔い改める時、私たちは神の真理に生きることができるようになるからです。主イエスは「**真理はあなた方を自由にする**」とヨハネ8章32節でお語りになりました。

神は、私たちが自信を無くして生きていくのではなくて、自由に喜んで生きを願ってくださるのです。ですから、このお方と共に歩いていくために、私たちは悔い改めつつ、信仰の歩みを歩んでいきたいのです。

お祈りをいたします。